

車の口にある板にて、踏板ともいふ、

〔茶花物語二十五〕

楚王の夢かんのとの尙侍藤原嬪子中略五日萬壽二年八月給ふ略殿の御まへ嬪子御とのごもらぬま、に、うちおはしましつる、御車の前板といふも

のにおしか、りて、何ごとにかあらん、うちなきて、泣くく、の給ひつ、あかさせ給ふ、

〔今昔物語二十八〕頼光郎等共紫野見物語第二

今昔攝津守源ノ頼光ノ朝臣ノ郎等ニテ有ケル、平ノ貞道、平ノ季武、口ノ公時ト云フ三人ノ兵有

ケリ略、而ル間賀茂ノ祭ノ返サノ日、此三人ノ兵云合セテ、何かデカ今日物ハ可見キト謀ケル

ニ略、今一人ガ云ク、下簾ヲ垂テ、女車ノ様ニテ見ムハ何ニト、今二人ノ者、此ノ義吉カリナムト

云テ略、中如此シテ行ク程ニ、三人乍ラ醉ヌレバ、踏板ニ物突散シテ、烏帽子ヲモ落シテケリ、

〔台記〕仁平三年九月十日、奉幣帛春日、大原野、吉田略、此第者高陽院尼、近日被行懺法、又巽角有佛

閣、雖無法名、先年以仁和寺法親王爲導師、被供養之、如此之事、非無所憚、家中不淨之時、於門外開之、

已爲故實、仍於西門外乘檳榔車依女院仰於西向立之、家司文章博士長光進申曰、外記景良

候略、仰可召之由、景良自北方直進入轅内置宮於踏板、置笏一々取之略、

〔徒然草上〕今出河のおほい殿兼、峨へおはしけるに、有栖川のわたりに、水の流れたる所にて、

さい王丸御牛を追たりければ、あがきの水前板迄さ、とか、りけるを、爲則御車のまりに候け

るが、希有の童かなか、る所にて、御牛をば追ものかといひたりければ略、

〔古今著聞集魚虫禽獸〕同安承二年、祇園會を菅博士行衡、三條堀川にて見けるに、車のうしろのか

たを引てすぎける牛、とみのをのかたより、車のまたに入て、車にかけたる牛の、左の腹をつきて

けり、行衡が牛、おどろきはしりければ、つきたる牛も、おなじくはしりけり、引てすぎつる童、うし

ろの方より、綱を取て引かへしけるほどに、車をうちかへさんとして、敷板もうしのつのつにあた